

2024年4月28日 第4主日礼拝 午前10時

聖書 ハガイ2章10-19節 説教 「今日から後の祝福」

今日はハガイ2:10-19から「今日から後の祝福」と題して2つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 聖なるもとの汚れたもの 10-14

今日の箇所はハガイの3回目の預言です。「10 ダレイオスの第二年の第九の月の二十四日、預言者ハガイに次のような主のことばがあった。」世の光紙4月号裏面の「聖書と古代オリエント」の記事に、ペルシアの王ダレイオス一世のレリーフや彼の時代の杭の写真が載っていました。考古学の発見によって、聖書に記されている出来事が確かな歴史的事実に基づくことが証明されてきました。聖書は歴史的な出来事の中でどのように神が働かれたかを記していることが分かります。3回目のハガイの預言は、ダレイオスの第二年、前520年、第九の月の二十四日、現在の11-12月にありました。これは神殿工事の再開後、ちょうど3か月が経った日です。この時期は小麦の種蒔きが終わり、来年の収穫の期待と不安が入り交じった状況の中に民はいました。というも、長い間不作が続いていたからです。神殿工事の再開1か月後の仮庵の祭の季節も、十分な収穫を得ることができず、民は不安に思っていました。そのような中で、ハガイは主のことばを民に伝え、民を励ましました。

11「万軍の主はこう言われる。律法について、祭司たちに尋ねよ。」ハガイは祭司たちに、律法について主のことばを伝えて、尋ねました。「12『人が聖なる肉を自分の衣の裾に入れて運び、その裾がパンや煮物、ぶどう酒や油、またはどんな食物にでも触れた場合、それは聖なるものとなるか。』祭司たちは『否』と答えた。」これはレビ記6:26-27に対応する質問です。そこにはこうあります。「罪のきよめのささげ物を献げる祭司はそれを食べる。それを聖なる所、会見の天幕の庭で食べる。その肉に触れるものはみな聖なるものとなる。」すなわち、罪のきよめのために献げられた動物の肉を祭司は食べることができ、それを食べるなら祭司は聖なるものとなります。またその肉に触れる聖所の器具も聖なるものとなります。しかし、その肉を祭司が自分の衣の裾に入れて運び、その裾が他の食べ物に触れてもそれらの食べ物は聖くなりません。このことは神の聖さは間接的に人や物を通して与えられず、直接神からのみ与えられるということです。

一方で次の汚れについては違います。「13 そこでハガイは言った。『もし死体によって汚れた人が、これらのどれかに触れたら、それは汚れるか。』祭司たちは『汚れる』と答えた」。この質問はレビ記22章の汚れについての規定と民数記19章の死人に触れた者の規定が背景にあります。民数記19:11にはこうあります。「死人に触れる者は、それがどの人のものであれ、7日間汚れる。」またレビ記22:5にはこうあります。「人を汚れさせる人間に触れるものもそうである。」すなわち、死人に触れた者は7日間汚れ、その人が触れるものも汚れるのです。このことは、罪は間接的にも広がって行くということです。一つの罪がその人の生活全体に影響を及ぼすのです。

この二つの問いと答えから、ハガイは神殿工事を18年間中断していた時のユダヤ人の霊的状态を語りました「14 それに応じてハガイは言った。『この民も、この国も、わたしにとってはそれと同じ。—主のことば—彼らの手が作ったすべての物もそれと同じ。そこで彼らが献げる物も汚れている。』」長い間神殿工事を中断していた時、民は「時はまだ来ていない。主の宮を建てる時は」と言っていました。そして神殿が廃墟のままなのに、自分たちだけが板張りの家に住んでいました。彼らはその時、神を第一とせず、自分第一の生活をしていました。それでいて、廃墟のままの神殿に神へのささげ物をしていました。しかしハガイは、神を第一とせず、神殿を建てず、自己中心の罪の中にいる民が神に献げ物をささげても、それらは汚れていると言ったのです。神はそのような汚れた献げ物を喜ばれません。神が喜ばれるのは神を第一とし、神の時を悟り、神のみこころを行う信仰です。その信仰を通して民は神のきよめをいただくことができるのです。そして、そのような信仰を彼らは1回目のハガイの預言に聞き従うことによって回復しました。だからその信仰にしっかり立って、神殿工事を継続することを神は願っておられるのです。

このことは私たちの信仰にも当てはまります。聖さは、直接神からだけ与えられます。教会に来ることは大切ですが、教会に参加することによって、罪が赦されるわけではありません。献金や奉仕をすることによって、罪がきよめられるのではありません。個人的に自分の罪を悔い改め、イエスを救い主と信じることによってのみ、神から罪の赦しときよめをいただくことができます。Iヨハネ1:7,9「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」「私たちは個人的にイエスを救い主と信じることによってのみ、神の恵みにより、罪を赦され、救われ、神の聖さにあずかり、神に受け入れられるのです。

一方、クリスチャンになったからと言って、罪を犯さない完全な人間になるわけではありません。むしろ、救われると、以前にも増して神の前に自分の罪を示されるようになります。クリスチャンになる前は何とも思わなかったことが、神にそれは罪だと示されて、悔い改めを迫られるのです。その時、たとえ悔い改めなくても、その人の救いは変わることがありません。しかし、神の前に悔い改めない罪があると、神との関係が罪の雲に囲まれて、弱くなってしまいます。そしてその霊的状态は、その人の生活すべてに影響を与え、神の祝福を失ってしまうのです。神はそのような状態を喜ばれません。神が喜ばれるのは、私たちが自分の罪を神に告白し、罪を悔い改めて、赦しときよめをいただくことです。そうすれば、神と

の関係は再び健全な状態に戻り、その人の生活全体に神の祝福が戻って来ます。

ですから、まだ個人的にイエスを自分の救い主として信じていない人は、ぜひ心を開いてイエスを信じ、罪の赦しと永遠のいのちの救いをいただきましょう。またすでにイエスを信じているクリスチャンは、神の前に罪を示されたら、すぐに、自分の罪を神に告白し、悔い改めて、イエスの血による赦しときよめをいただきましょう。そうすれば、神は私たちの生活のすべてを祝福して下さいます。クリスチャンは生涯、悔い改めの連続ですが、悔い改めには神の赦しときよめが伴い、聖化の祝福を得ることができるのです。

2. 今から後の祝福 15-19

1 回目のハガイの預言では「あなたがたの歩みをよく考えよ」と語り、過去の自分たちの歩みがどうであったかを考え、今どうすべきかを考えるように民に促しました。3 回目の預言では「今日から後のことをよく考えよ」と言って、将来における神の約束に目を向けるようにと民を励ましました。「15a さあ今、あなたがたは、今日から後のことをよく考えよ。」18 節にも繰り返し語られます。「18 さあ、あなたがたは今日から後のことをよく考えよ。第九の月の二十四日、主の神殿の基が据えられた日から後のことをよく考えよ。」18 節からわかることは 3 回目のハガイの預言が語られた第九の月の二十四日は主の神殿の基が据えられた日、すなわち定礎式の日だということです。工事は 3 か月前から始まっていました。そしてこの日喜ばしい定礎式を迎えたのです。この記念すべき日を覚えておき、「今日から後のことをよく考えよ」と神は言われました。

15b-17 は神殿工事を中断していた時のことです。「15b 主の神殿で石が積み重ねられる前、16 あなたがたはどうであったか。二十の麦束が積んであるところに行っても、あるのは十束。ぶどう酒五十杯を汲もうと石がめに行っても、あるのは二十杯。17 わたしはあなたがたを、あなたがたの手が作ったすべての物を、立ち枯れと黒穂病と雹で打った。しかし、だれ一人わたしに帰って来なかった。一主のことば」すでに 1 章の 1 回目の預言でも語られたように、民が神第一ではなく、自分第一の生活をしたため、神は自然界を通して彼らの罪を指摘されました。朝露は下りず、日照りを呼び寄せました。さらには立ち枯れと黒穂病と雹で作物を打ちました。その結果、十分な収穫を得ることができませんでした。それは彼らがこのことを通して、自分たちの罪に気づき、神に立ち返るためでした。けれども 18 年間「だれ一人わたしに帰って来なかった」と言われました。そんな民もハガイの預言を通して、神に立ち返り、神のことばに聞き従って、神殿工事を再開しました。しかし、工事再開後最初の秋の収穫も豊作ではなく、民はがっかりしました。そのような中でこの日、神殿の定礎式を迎えました。そしてこの記念すべき日を覚え「今日から後のことをよく考えよ」と神は言われました。

「19 種はまだ穀物倉にあるのか。ぶどうの木、いちじくの木、ざくろの木、オリーブの木は、まだ実を結ばないのか。今日から後、わたしは祝福する。」彼らは神殿工事再開後初めての小麦の種蒔きを終えたばかりです。ですから、穀物倉には種はありません。またその時は冬ですから、ぶどうの木、いちじくの木、ざくろの木、オリーブの木は、まだ実を結んでいません。民は来年も不作が続くのではという不安を持っていました。それに対して神は言われました。「今日から後、わたしは祝福する。」これが「今日から後のことをよく考えよ」と言われた神の答えです。神は、神のことばに従い、神殿工事を進める民を祝福し、彼らの必要を満し、彼らの将来を祝福すると約束して下さいました。民は今日からは神が祝福して下さるといふ約束を信じ、将来を期待し、待ち望んでいけばいいのです。

この神の祝福は私たちの信仰生活にも当てはまります。私たちにも信仰の記念すべき日があります。イエスを信じて救われた日や信仰の確信を持つことができた日を覚えている人には、その日は信仰の記念日です。ある人は徐々に信じてきたので、いつ救われたのかわからないかもしれません。けれどもすべてのクリスチャンは洗礼を受けた日があります。その日は私たちにとって大切な信仰の記念日です。神はそのような信仰生活の出発の日に、「今日から後、わたしは祝福する」と約束して下さっていたのです。

確かにイエスを信じてクリスチャンになったからと言って、その日からすべてが変わるわけではありません。ユダヤの民もみことばに従い、神殿工事を再開しても、すぐに収穫の変化があったわけではありませんでした。しかし、彼らが神に立ち返り、みことばに従った時から、神との関係はすでに新たにされていました。ですから、来年の収穫を期待することができたのです。私たちもイエスを信じ救われた時から、神との平和の関係が与えられました。ですから、すぐに変化が現れなくても、救われてからの人生は確かに祝福されているのです。クリスチャン生活を長く続けられれば、自分の人生はイエスを信じてから、確かに神の祝福をいただいて来たことを実感することでしょう。

また私たちはクリスチャンになってからも、自分第一、自己中心になることがあります。そのような時、悔い改めて神第一の生活に方向転換するなら、その日は私たちにとって信仰の記念日となり、「今日から後、わたしは祝福する」との神の約束をいただく日となります。イエスを信じた日、信仰を公に告白して洗礼を受けた日、悔い改めて神第一の生活に方向転換した日、神はそのような私たちの信仰の記念日に、「今日から後、わたしは祝福する」と約束して下さったことを覚えて感謝しましょう。そしてこれからも「今日から後、わたしは祝福する」という神の約束を信じ、神の国と神の義を第一とする信仰の歩みを続けましょう。そしてすべての必要を満して下さるといふ神の祝福にあずかりましょう。